

秘

樞密院官制中改正ノ件(第六條ノ改正)ニ關シ本月二十三日附ヲ以テ御通知申上候内閣通牒三件ノ内二件別紙ノ通り訂正(名宛ノ部分訂正)有之候ニ付依命更ニ此段及通知候也

昭和十三年十二月二十七日

樞密院書記官

秘

內閣閣甲第三六四號

昭和十三年十二月二十一日

內閣書記官長風見章

樞密院書記官長村上恭一殿

今般樞密院官制第六條ノ規定改正ニ伴ヒ同條第六號ノ改正規定ノ國際條約ノ解釋ニ關シ別紙ノ通閣議決定相成候條依命爲念申進候

六

(別紙)

(昭和十三年十二月十三日閣議決定)

樞密院官制第六條第六號ノ改正規定

ノ國際條約ノ解釋ニ關スル件

樞密院官制第六條第六號ノ改正規定ノ國際條約ハ汎ク國際間ノ取極ヲ指稱シ條約ナル名稱ヲ有スルモノノミナラズ協約協定議定書等ノ名稱ヲ有スルモノヲモ包含スルモノニシテ現行樞密院官制第六條ノ列國交渉ノ條約及約束ト其ノ範圍ヲ同ジクスルモノトス

內閣閣甲第三三六號

昭和十三年十二月二十一日

內閣書記官長風見章

樞密院書記官長村上恭一殿

今般樞密院官制第六條ノ規定改正ニ伴ヒ貴院
御諮詢事項ニ關スル諒解事項別紙ノ通閣議決
定相成候條依命爲念申進候

(別紙)

(昭和十三年十二月二日閣議決定)

樞密院御諮詢事項ニ關スル諒解事項

教育制度ノ基礎ニ關スル事項ハ從前通り勅令ヲ以テ規定スベク今後若シ法律ヲ以テスル場合ニ於テモ樞密院御諮詢事項トシテ取扱フモノトス



閣下 第三三五號

案起 昭和十三年十二月二十日

裁可昭和 年 月 日 施行 昭和 年 月 日 決定昭和十三年十二月二十日



88/1

内閣總理大臣

内閣書記官長



内閣書記官



佐藤



然 樞密院官制第六條ノ規定改正ニ伴ヒ同院御諮詢事項ノ範圍ニ關シ 勅定相成タルニ付左案ノ通樞密院議長及法制局長官へ通牒相成可

案 (一)

昭和十三年十二月二十一日

内閣總理大臣

樞密院議長 宛

二

日

月

今般樞密院官制第六條ノ規定改正ニ伴ヒ樞密院御諮詢事項ノ範圍ニ
關スル件別紙ノ通勅定相成候條此段申進候

追テ明治三十三年四月九日附ノ樞密院御諮詢事項ニ關スル御沙汰
書及同年五月十二日上奏同月十五日裁可ヲ經タル右御沙汰書ニ關
スル解釋ハ今回ノ樞密院官制第六條ノ規定改正ノ結果自然失效ト
相成候旨勅裁ヲ經候此段爲念申添候

案 (二)

昭和十三年十二月二十一日

內閣書記官長

法制局長官宛

今般樞密院官制第六條ノ規定改正ニ伴ヒ樞密院御諮詢事項ノ範圍ニ

(白井納)

關スル件別紙ノ通勅定相成候條御了知相成度依命此段及通牒候

追テ明治三十三年四月九日附ノ樞密院御諮詢事項ニ關スル御沙

汰書及同年五月十二日上奏同月十五日裁可ヲ經タル右御沙汰書

ニ關スル解釋ハ今回ノ樞密院官制第六條ノ規定改正ノ結果自然

失效ト相成候旨勅裁ヲ經候此段依命申添候

本件樞密院ヘノ通牒案ニ付キテハ當初ノ原案ニ對シ森山法制局參事官ヨリ符箋ノ如キ修正ノ希望アリタリ。此ノ修正意見ニ對シテハ官房總務課トシテハ別紙ノ如キ意見ニシテ修正スルノ必要ナキモノト思料セラレタルモ法制局長官ヨリ今回ノ樞密院官制改正ノ問題ノ經過等ニ顧ミ政治的考慮ノ結果是非修正案ニテ進行セラレタキ旨ノ話アリ其ノ意味ニ於テ原案ヲ希望ノ通修正スルコトト爲シタリ

昭和十三年十二月二十日



一、御諮詢事項ハ陛下ノ御勅定ニナルモノデ、樞密院ハソレニ依ツテ御諮詢ヲ待ツテ會議ヲ開クモノデアツテ何レモ全ク政府ノ責任ニ於テ奏請スルモノデアルノデ形式上ハ何等樞密院ガ關知スベキモノデナイト思ハレマス。實際問題トシテ非公式ノ協議交渉ノアルハ別問題ト思ヒマス。

二、然シナガラ御諮詢事項範圍ヲ樞密院ガ承知シテキナイコトハ不便デアリ、非、實際的デアリ又適當デナイト思ヒマスカラ爲念通知シ置クヲ相當ト考ヘマス。

三、明治三十三年ノ御沙汰書ガ樞密院ニ御下ゲニナツテキルコト及同御沙汰書ノ解釋ガ樞密院ニ通知シアルト云ヒマスガソレハ關知シナイコトト思ツテヨイト思ヒマス。

研究ノ結果前回ト異ル手續ヲ執リマシタ以上前回ト異ツテモヨイト
思ヒマス。

四 追書ヲ附スルノ點ハ當然失效シタルモノヲ爲念失效スルモノナルコ
トヲ附記シテ之ヲ御認メ願ツタ程度ノ意味ヲ勅裁ニ依ツテ失效ニナ
ツタモノデハナイト了解シマス。追テ書ヲ附スル必要ハナイヤウニ
思ヒマス。

五 樞密院ニ於テ明治三十三年ノ御沙汰書ガ生キテオルト解釋スルナレ
バ其レハ何ノ根據ニ依ルモノデセウカ甚ダ疑問ニ思ヒマス。假リニ
生キテオルト解釋スルモソレハ御隨意ト思ヒマス。
若シ失效シタリヤ否ヤノ質問ガアリマシタラソノ時ハ失效シタリト
答ヘラレレバ足ルヤウニ思ヒマス。

大諒解事項ノ通牒ヲ書記官長ヨリニスルコトハ異存アリマセン。

内

閣

本件ハ左ノ通御取計ニ相成候様致度

一、^レ為念^レヲ削除スルコト

二、左ノ如キ意味ノ追書ヲ附スルコト

追テ明治三十三年四月九日附ノ御沙汰書及同年五月十二日上奏同月十五日裁可ヲ經タル右御沙汰書三閱スル解釋ハ今回ノ樞密院官制第六條ノ規定改正ノ結果自然失效ト相成候旨勅裁ヲ經タリ此段爲念申添候^レ

理由

御沙汰書ハ樞密院ヘモ下付セラレ居リ且同解釋書モ政府ヨリ樞密院ヘ通知サレ居ルモノノ由ナルヲ以テ、今回ノ樞密院官制ノ改正ニ伴ヒ其ノ自然失效ト爲^レタル旨ヲ樞密院ヘ通知スルコトハ當然ノ措置ナリト思未セラレ(樞密院内部ニ於テ自然失效ト爲^ルルハ筋合^ハモ^カ否^カニ付意見^ハ居^リタル趣トハ嘗テ

申上ケタル通)

内

閣

案 (一)

年 月 日

内閣總理大臣

樞密院議長 宛

今般樞密院官制第六條ノ規定改正ニ件ヒ樞密院御諮詢事項ノ範圍ニ關
スル件別紙ノ通勅定相成候條爲念此段申進候

案 (二)

年 月 日

内閣

内閣書記官長

法制局長官 宛

今般樞密院官制第六條ノ規定改正ニ件ヒ樞密院御諮詢事項ノ範圍ニ關
スル件別紙ノ通勅定相成候條御了知相成度依命此段及通牒候

(白井納)

案 (一)
年 月 日

内閣總理大臣

書記官長ノ依命通知

議長宛

今辨ナラズニ制第六條ノ規定改正ニ件ヒ貴院御諮詢事項ニ關スル
諒解事項別紙ノ通閣議決定相成候條爲念此段申進候

案 (二)

年 月 日

内閣書記官長

法制局長官宛

樞密院官制第六條ノ規定改正ニ件ヲ樞密院御諮詢事項ニ關スル諒
解事項去月三十日上申（別紙）ノ通閣議決定相成候條依命及通牒候

案 (一)

年 月 日

内閣總理大臣

樞密院議長宛

今般樞密院官制第六條ノ規定改正ニ件ヒ同條第六條ノ改正規定ノ

國際條約ノ解釋ニ關シ別紙ノ通閣議決定相成候條爲念此段申進候

件ノ内閣書記官長ノ依命通知
程度ニテ可ナラズヤ 案

年 月 日



内閣書記官長

法制局長官宛

樞密院官制第六條ノ規定改正ニ伴フ同條第六條^抄ノ改正規定ノ國際
條約ノ解釋ニ關スル件本月十二日上申(別紙)ノ通閣議決定相成
候條依命及通牒候



樞密院官制第六條ノ規定改正ニ伴ヒ同院
御諮詢事項ノ範圍ニ關シ勅定方ノ件

右謹テ裁可ヲ仰ク

昭和十三年十二月十六日

内閣總理大臣公爵近衛文磨



閣甲三三五

十二月十六日閣議決定

昭和十三年十一月三十日

内閣書記官長



内閣書記官



内閣總理大臣 友

法制局長官



外務大臣

友

陸軍大臣

友

文部大臣

友

逓信大臣

友

厚生大臣

友

内務大臣

友

海軍大臣

友

農林大臣

友

鐵道大臣

友

大藏大臣 池田

司法大臣

友

商工大臣 池田

拓務大臣

友

樞密院官制第六條ノ規定改正ニ伴ヒ同院御諮詢事項ノ範圍ニ關スル件別紙ノ通勅定方奏請ノ儀閣議決定セラレ可然ト

法制局

認
ム

追テ明治三十三年四月九日附ノ御沙汰書
及同年五月十二日上奏同月十五日裁可ヲ
經タル右御沙汰書ニ關スル解釋ハ今
回ノ樞密院官制第六條ノ規定改正ノ
結果自然失効ト相成ル儀ニ有之

(昭和十三年十二月十六日勅定)

樞密院諮詢事項ノ範圍ニ關スル件

樞密院官制第六條第三號ノ帝國憲法ニ附屬スル法律及勅令ハ概本
左ノ如シ

- 一 議院法
- 二 貴族院令
- 三 貴族院各種議員ノ選舉ニ關スル規則
- 四 衆議院議員選舉法及衆議院議員選舉法施行令
- 五 裁判所構成法、裁判所構成法施行條例及判事懲戒法

六 陪審法

七 行政裁判法及行政裁判所長官評定官懲戒令

八 會計法

九 會計検査院法及會計検査官懲戒法

十 内閣官制

十一 公式令

シ
樞密院官制第六條第八號ノ教育ニ關スル重要ノ勅令ハ概ネ左ノ如

一 各學校令（師範教育令ヲ含ム）及幼稚園令

二 朝鮮其ノ他ノ外地ノ教育ノ基礎ニ關スル勅令

三 學位ニ關スル勅令

樞密院官制第六條第九號ノ行政各部ノ官制其ノ他ノ官規ニ關スル
重要ノ勅令ハ概ネ左ノ如シ

- 一 各省官制通則
 - 二 親任官待遇以上ノ官職ノ設置及廢止ニ關スル勅令
 - 三 各省ノ設置及廢止並ニ權限ノ變更ニ關スル勅令
 - 四 內閣及各省部内ノ部局ノ設置及廢止ニ關スル勅令
 - 五 普通地方行政官廳ノ設置及廢止ニ關スル勅令
 - 六 朝鮮其ノ他ノ外地ノ最高行政官廳及其ノ部内ノ部局ノ設置
及廢止ニ關スル勅令
- 前五號ノ設置及廢止ハ當該官制ノ全部改正ノ場合ヲ含ム
第四號及第六號ノ部局トハ地方部局ヲ除キ名稱ノ如何ヲ問ハ

ス勅任官ヲ長トスル内局及外局ヲ謂フ

七 高等官ノ官等分階ノ制ニ關スル勅令

八 高等文官ノ初敘、轉任及再任ノ場合ニ於ケル官等ノ制竝ニ

官等陞敘ノ制ニ關スル勅令

九 高等文官ノ任用及試験ニ關スル勅令

十 文官ノ分限ニ關スル勅令

十一 官吏ノ服務紀律ニ關スル勅令

十二 文官ノ懲戒ニ關スル勅令

樞密院官制第六條第十一號ノ事項中ニハ左ノ諸件ヲ含ム

一 宣戰ノ布告

二 重要ナル國際條約ノ廢棄

- 三 在外帝國大使館及公使館ノ設置及廢止
- 四 特ニ重要ナル機關ノ官制
- 五 罰則命令ノ根據タル法律及勅令
- 六 制令及律令ノ根據タル法律
- 七 勅令、制令及律令中直接ニ長期三年ヲ超ユル懲役又ハ長期六年ヲ超ユル禁錮以上ノ刑ヲ定ムル規定ニ關スルモノ
- 八 朝鮮其ノ他ノ外地ノ裁判制度及地方制度ノ基礎ニ關スル勅令、制令及律令

内
閣

参照

樞密院官制第六條第六ニ依リ諮詢スヘキ事項中別記ノ勅令ハ最モ重要ナルモノニ付自今同院ノ審議ニ付セシム

御 璽

明治三十三年四月九日

- 一 教育制度ノ基礎ニ關スル勅令
- 一 内閣官制ニ關スル勅令
- 一 各省官制通則ニ關スル勅令
- 一 臺灣總督府官制ニ關スル勅令
- 一 高等官官等ニ關スル勅令
- 一 官吏服務紀律ニ關スル勅令

- 一 文官懲戒ニ關スル勅令
- 一 文官試験ニ關スル勅令
- 一 文官任用ニ關スル勅令
- 一 文官分限ニ關スル勅令

(日本標準規格B4判) (榛原納)

明治三十三年五月十二日山縣內閣總理大臣上奏同月十五日裁可

樞密院へ御諮詢可相成事項ニ關スル御沙汰書中左ノ通解釋相成可然哉

一、高等官官等ニ關スル勅令

一、官等分階ノ制ニ關スル勅令

二、初級、轉任、再任ノ場合ニ於ケル官等ノ制ニ關スル勅令

三、陞級ノ制ニ關スル勅令

四、親任式ヲ以テ敘任スル官ノ新設ニ關スル勅令

一、教育ノ基礎ニ關スル勅令

一、小學校令

二、中學校令

三高等女學校令

四師範教育令

五高等學校令

六大學令

七實業學校令

(日本標準規格B4列) (榛原納)

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ樞密院官制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ
公布セシム

御名 御璽

年 月 日

内閣總理大臣

勅令第 號

樞密院官制中左ノ通改正ス

第六條 樞密院ハ左ノ事項ニ付諮詢ヲ待テ會議ヲ開キ意見ヲ上奏
ス

一 皇室典範及皇室令ニ於テ樞密院ノ權限ニ屬セシメタル事項
竝ニ特ニ諮詢セラレタル皇室令

- 二 帝國憲法ノ條項ニ關スル草案及疑義
- 三 帝國憲法ニ附屬スル法律及勅令
- 四 樞密院ノ官制及事務規程ノ改正
- 五 帝國憲法第八條及第七十條ノ勅令
- 六 國際條約ノ締結
- 七 帝國憲法第十四條ノ戒嚴ノ宣告
- 八 教育ニ關スル重要ノ勅令
- 九 行政各部ノ官制其他ノ官規ニ關スル重要ノ勅令
- 十 榮典及恩赦ノ基礎ニ關スル勅令
- 十一 前各號ニ掲ゲタルモノノ外特ニ諮詢セラレタル事項

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第 四 号

理由

樞密院御諮詢事項ノ範圍ニ付テハ樞密院官制第六條ノ規定竝ニ之ニ關スル明治三十三年四月九日附ノ御沙汰書及同年五月十二日上奏同月十五日裁可ヲ經タル右御沙汰書ニ關スル解釋ニ依リ明ニセラレタル處御沙汰書下付後ニ於テモ諸種ノ事情ニ依リ御諮詢事項ノ範圍ハ漸次擴大スルニ至レリ、而シテ成規又ハ慣例ニ依ル現在ノ御諮詢事項中彼此權衡ヲ失スルモノアリ或ハ御諮詢事項ヨリ之ヲ除キ或ハ新ニ之ヲ加フルヲ相當ト認メラルルモノナキニ非ズ、茲ヲ以テ此ノ際此等ニ就キ相當ノ整理ヲ加フル爲樞密院官制第六條ヲ改正スルノ必要アリ。

三

閣甲第 三三六號

起
昭和十三年十二月二十一日

裁可
昭和 年 月 日
施行
昭和 年 月 日
決定
昭和十三年十二月二十日行

内閣總理大臣

内閣書記官長

内閣書記官

通牒案

案 (一)

昭和十三年十二月二十一日

内閣書記官長

樞密院書記官長宛

今般樞密院官制第六條ノ規定改正ニ伴ヒ貴院御諮詢事項ニ關スル

諒解事項別紙ノ通閣議決定相成候條依命爲念申進候

案 (二)

昭和十三年十二月二十一日

内閣書記官長

法制局長官宛

樞密院官制第六條ノ規定改正ニ伴フ樞密院御諮詢事項ニ關スル諒
解事項去月三十日上申(別紙)ノ通閣議決定相成候條依命及通
牒候

(白井納)

閣甲三三六

十二月二日閣議決定

昭和十三年十二月三十日

内閣書記官長



内閣書記官



内閣總理大臣 變

法制局長官



外務大臣

田

陸軍大臣

角

文部大臣

尾

遞信大臣

野

厚生大臣

五

内務大臣

尾

海軍大臣

五

農林大臣

田

鐵道大臣

五

大藏大臣

田

司法大臣

五

商工大臣

田

拓務大臣

五

樞密院官制第六條ノ規定改正ニ伴ヒ別紙ノ通閣議決定セラレ可然ト認ム

法制局

(昭和十三年十二月二日閣議決定)

樞密院御詔詢事項ニ關スル諒解事項

教育制度ノ基礎ニ關スル事項ハ從前通り勅令ヲ以テ規定スベク今後若シ法律ヲ以テスル場合ニ於テモ樞密院御詔詢事項トシテ取扱フモノトス



閣甲第三六四號

案起

昭和十三年十二月二十日

裁可昭和 年 月 日 施行
決定昭和十三年十二月二十日

昭和 年 月 日

內閣總理大臣

內閣書記官長

內閣書記官



佐藤

通牒案

案(一)

昭和十三年十二月二十一日

內閣書記官長

樞密院書記官長宛

今般樞密院官制第六條ノ規定改正ニ件ヒ同條第六號ノ改正規定ノ

國際條約ノ解釋ニ關シ別紙ノ通閣議決定相成候條依命爲念申進候

案 (二)

昭和十三年十二月二十一日

內閣書記官長

法制局長官宛

樞密院官制第六條ノ規定改正ニ件ヲ同條第六號ノ改正規定ノ國際條約ノ解釋ニ關スル件本月十二日上申(別紙)ノ通閣議決定相成候條依命及通牒候

(白井納)

閣甲三六四

十二月十三日閣議決定

昭和十三年十二月十二日

内閣書記官長

内閣書記官

内閣總理大臣 齋藤

法制局長官

外務大臣

齋藤

陸軍大臣

齋藤

文部大臣

齋藤

逓信大臣

齋藤

厚生大臣

齋藤

内務大臣

齋藤

海軍大臣

齋藤

農林大臣

齋藤

鐵道大臣

齋藤

大藏大臣

齋藤

司法大臣

齋藤

商工大臣

齋藤

拓務大臣

齋藤

樞密院官制第六條ノ規定改正ニ伴ヒ同條第六號ノ改正規定ノ國際條約ノ解釋ニ關シ別紙ノ通閣議決定セラレ可然ト

法制局

認
△

注
制
局

昭和十三年十二月十二日

(昭和十三年十二月十三日閣議決定)

樞密院官制第六條第六號ノ改正規定
ノ國際條約ノ解釋ニ關スル件

樞密院官制第六條第六號ノ改正規定ノ國際條約ハ汎ク國際間ノ取極ヲ
指稱シ條約ナル名稱ヲ有スルモノノミナラズ協約、協定、議定書等ノ
名稱ヲ有スルモノヲモ包含スルモノニシテ現行樞密院官制第六條ノ列
國交渉ノ條約及約束ト其ノ範圍ヲ同ジクスルモノトス

一
二
三
四
五
六

内閣

参照

● 樞密院官制及事務規程

明治二十一年四月三十日
勅令第二十二號

改正 明治二十三年第二一六號、二六年第二一〇號、三六年第一一七號、四二年第一八四號

大正二年第一三七號、七年第三五五號

朕元勳及練達ノ人ヲ撰ミ國務ヲ諮詢シ其啓沃ノ力ニ倚ルノ必要ヲ察シ樞密院ヲ設ケ朕力至高顧問ノ府トナサントス茲ニ其官制及事務規程ヲ裁可シ之ヲ公布セシム
(總理大臣副署)

樞密院官制

第六條 樞密院ハ左ノ事項ニ付諮詢ヲ待テ會議ヲ開キ意見ヲ上奏ス

- 一 皇室典範ニ於テ其權限ニ屬セシメタル事項
- 二 憲法ノ條項又ハ憲法ニ附屬スル法律勅令ニ關スル草案及疑義
- 三 憲法第十四條戒嚴ノ宣告同第八條及第七十條ノ勅令及其他罰則ノ規定アル勅令
- 四 列國交渉ノ條約及約束
- 五 樞密院ノ官制及事務規程ノ改正ニ關スル事項
- 六 前諸項ニ掲グルモノ、外臨時ニ諮詢セラレタル事項

(新)

参照

○ 樞密院官制及事務規程
明治三十一年四月
勅令第百三十二號
(總理大臣
副署)

樞密院官制

第六條 樞密院ハ左ノ事項ニ付諮詢ヲ待テ會議ヲ開キ
意見ヲ上奏ス

(略)

六 國際條約ノ締結

(略)

参 考

條約ノ表題ニ現ハレタル條約ノ諸種ノ指稱ノ例

一、條 約 日本國及「ビルマ」間通商關係ニ關スル條約。

一、協 約 日米間著作権保護ニ關スル協約。

一、協 定 共產「インターナショナル」ニ對スル協定。

一、議 定 書 日本國滿洲國間議定書。

一、取 極 日本國「ポルトガル」國間通商航海ニ關スル取極。

國際條約ナル措辭ハ公式令第八條ノ用例ヲ踏襲シタルモノナリ

外甲八二

昭和十二年十二月二十七日

内閣書記官長

内閣書記官

内閣總理大臣 友

法制局長官

外務大臣

陸軍大臣

文部大臣

逓信大臣

内務大臣

海軍大臣

農林大臣

鐵道大臣

大藏大臣

司法大臣

商工大臣

拓務大臣

別紙外務大臣請議外務部内臨時職員設置制中改正ノ件

ヲ審査スルニ右ハ相當ノ儀ト思考ス依テ請議ノ通

法制局

閣議決定セラレ可然ト認ム

勅令案

呈案附箋ノ通

治
制
局

急

未開封

密件

内閣總理大臣 公爵近衛文麿殿

外務部内臨時職員設置制中改正ノ件

本件ニ關シ別紙案文ノ通勅令御發布相成候様致度此段及請議候也



外甲八二

外務省

12.5

IMT 646

129



朕外務部内臨時職員設置制中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名御璽

昭和十三年一月七日

内閣總理大臣

外務大臣

外務省

勅令第 四 號

外務部内臨時職員設置制中左ノ通改正ス

第二條ノ三ヲ第二條ノ四トス

第二條ノ三 通商振興ニ關スル事務ニ從事セシムル爲在外公館ニ左

ノ職員ヲ置ク

大使館商務書記官

專任三人

公使館商務書記官

專任二人

領事

專任三人

副領事

專任五人

書記生

專任一人

附 則

外 務 省

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

外
務
省

IMT 646

132

理由書

輒近ニ於ケル我國通商貿易ノ躍進ト其ノ複雑化トニ伴ヒ在外帝國公館ニ於ケル諸般ノ事務増加スルニ至レルヲ以テ海外市場ニ於ケル帝國商權ノ維持擴張ニ關スル事務ニ當ラシメンカ爲此ノ際新ニ左記職員ヲ臨時在外公館ニ増置セントスルモノナリ

記

大使館商務書記官

三人

公使館商務書記官

二人

領事

三人

副領事

五人

外務省

書記生

計

一人

十四人

外務省

參照

○外務部内臨時職員設置制

昭和三年五月
勅令第七十八號

(總理、外務
大臣副署)

第二條ノ三 國際文化事業ニ關スル事務ハ當分ノ内文化事業部ニ於テ之ヲ掌ラシム

國際文化事業ニ關スル事務ニ從事セシムル爲外務省ニ左ノ職員ヲ置キ文化事業部ニ屬セシム

書記官 專任一人

事務官 專任二人

屬 專任四人

第三條 研究所及圖書館新築ニ關スル事務ニ從事セシムル爲外務省ニ左ノ職員ヲ置キ文化事業部ニ屬セシム

技師 專任一人

助手 專任二人

技師 專任一人

助手 專任二人

日本書紀



参照

昭和十二年度外務省所管豫算

歲出臨時部

第八款 通商振興費

第一項 俸給

第二目 奏任俸給

節	員數	一人當年額	金額	備考
第五節 商務書記官	四	三、六四。	一四、五六。	
第六節 商務領事	三	三、〇四。	九、一二。	
第七節 商務副領事	六	二、二八。	一三、六八。	
第三目 判任俸給	一			

第二節 商務書記生

一

九八五

九八五

第一級 商務書記生

六

二二八

一三六

第二級 商務書記生

三

三〇四

一五二

第三級 商務書記生

四

三六四

一七六

第四級 商務書記生

五

四二四

二一〇

第二節 簿記生

第一級

部

部

簿記生

簿記生

昭和十二年式簿記生

日本標準規格B4(十一行全)(木村納)

總機密第一一六〇號

昭和十二年十二月十日

外務次官 堀内謙介

大藏次官 石渡莊太郎 殿

範圍内十九ヶ所ノ土地ノ變更並ニ在支ナキ旨 大藏省主計局長トヨリ
制局 主査

商務職員ノ増置ニ關スル件

曩ニ昭和十一年度豫算案トシテ貴省ト御協議ヲ了シ議會ノ協贊ヲ
經タル商務職員増置計畫ハ別紙甲號ノ通ニシテ又之ニ伴フ關係勅
令ハ別紙乙號案ノ如クスル豫定ナリシカ其ノ後種々ノ經緯アリテ
今日迄之カ實行ニ入ル能ハサリシモ今般是非トモ實施致度ク然ル
ニ右豫算案ハ之カ作成ノ時ヨリ既ニ二ケ年ヲ經過致居リ別記甲號
通ノ計畫ニテハ現状ニ適セサル部分ヲ生スルニ至リタルニ付商工
省側トモ篤ト協議ノ上別紙丙號ノ新計畫及別紙丁號ノ勅令案ヲ作

別紙添付

戊

外務省

成セリ就テハ右事情御了承ノ上新計畫ニ依リ該豫算實行方特ニ御
 同意相成度此段申進ス
 本信寫送付先 貿易局長官

戊

外務省

甲號

(一) 商務職員配置個所 (十三箇所十三名)

大使館商務書記官 二 (佛、伯各一名)

公使館商務書記官 二 (暹、智各一名)

領事 三 (「シドニー」「アレキサンドリア」
「ダイバン」各一名)

副領事 六 (「イラン」「カルカタ」「パナマ」
「スラバヤ」「モンバサ」「ケイプタ
ウン」各一名)

(他ニ書記生一名ヲ「ダイバン」ニ置ク)

乙 號

勅令第 號

外務部内臨時職員設置制中左ノ通改正ス

第二條ノ三ヲ第二條ノ四トス

第二條ノ三 通商振興ニ關スル事務ニ從事セシムル爲在外公館ニ左

ノ職員ヲ置ク

大使館商務書記官 專任二人

公使館商務書記官 專任二人

領 事 專任三人

副 領 事 專任六人

書 記 生 專任一人

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

(二) 商務職員配量個所表 (十三ヶ所十三名)

巴 里 一人

「リオ、デ、ジャネイロ」 一人

「バンコック」 一人

「サンチャゴ」 一人

「シドニー」 一人

「アレキサンドリア」 一人

「ダーバン」 一人

「イラン」 一人

「カルカッタ」 一人

「バナマ」 一人

「スラバヤ」 一人

「モンバサ」 一人

「ケープタウン」 一人

別ニ「ダーバン」ニ書記生一名ヲ置ク

丙 號

(一) 商務職員配置個所 (十一ヶ所十三名)

大使館商務書記官

三 (佛、英、伯各一名)

公使館商務書記官

二 (亞、暹各一名、~~南阿~~南阿各一名)

領 事

三 (アレキサンドリア (兼書記官)

副 領 事

五 (スラバヤ、紐育 (兼書記官) 各一名、パナマ二名)

(他ニ書記生一名ヲ香港ニ置ク)

(二) 商務職員配置箇所 (十一箇所十三名)

ブエノス、アイレス 一 人

~~グアタマラ~~ ~~グアタマラ~~ 二 人

アレキサンドリア 一 人

巴 里 一 人

パナマ 二 人

シドニー 一 人

スラバヤ 一 人

バンコック 一 人

ロンドン 一 人

ニューヨーク 一 人

リオ、デ、ジャネイロ 一 人

備考 別ニ書記生一名ハ香港ニ置ク

丁號

勅令第 號

外務部内臨時職員設置制中左ノ通改正ス

第二條ノ三ヲ第二條ノ四トス

第二條ノ三 通商振興ニ關スル事務ニ從事セシムル爲在外公館ニ左

ノ職員ヲ置ク

大使館商務書記官 專任三人

公使館商務書記官 專任四人

領 事 專任三人

副 領 事 專任四人

書 記 生 專任一人

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス



外甲第一六號

案起

昭和十三年三月九日

閣議

決定昭和十三年三月九日施行
裁可昭和十三年三月九日

昭和十三年三月十一日

公布

內閣總理大臣 **友**

內閣書記官長

內閣書記官

外務大臣

友

陸軍大臣

友

文部大臣

友

遞信大臣

友

厚生大臣

友

內務大臣

友

海軍大臣

友

農林大臣

友

鐵道大臣

友

大藏大臣

友

司法大臣

友

商工大臣

友

拓務大臣

友

明治四十一年勅令第五號在南滿洲帝國領事

館附警察官ニ關スル件廢止ノ件

右樞密院ノ御諮詢ヲ經テ御下付ニ付同院
上奏ノ通裁可ヲ奏請セラレ可然ト認ム

上諭案

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ明治四十年勅令
第五號在南滿洲帝國領事館附設警察官ニ關ス
ル件廢止ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

昭和十三年 三月 十日

内閣總理大臣
外務大臣

(樞密院上奏ノ通)

内閣

勅令第百八號

明治四十一年勅令第五號ハ之ヲ廢止ス

附則

本令ハ昭和十三年四月一日ヨリ之ヲ施

行ス

臣等明治四十一年勅令第五號在南滿洲帝國領事館附警察官ニ關スル件廢止ノ件諮詢ノ命ヲ恪ミ本月九日ヲ以テ審議ヲ盡シ之ヲ可決セリ乃チ謹テ上奏シ更ニ聖明ノ採擇ヲ仰ク

昭和十三年三月九日

樞密院議長男爵臣平沼騏一郎

外甲一六

昭和十三年三月四日御下付

昭和十三年三月四日

内閣書記官長



内閣書記官



御覽見濟内閣へ御下付

法制局長官



外務大臣

陸軍大臣

文部大臣

逓信大臣



厚生大臣

内務大臣

海軍大臣

農林大臣

鐵道大臣

大藏大臣

司法大臣

商工大臣

拓務大臣

別紙内閣總理大臣及外務大臣請議明治四十一年勅令第五號廢止ノ件請議ヲ審査スルニ右ハ相當ノ儀ト思考ス依テ請議ノ通

法制局

閣議決定セラレ可然ト認ム

追テ本件ハ文官任用ニ關スル勅令ナ
ルヲ以テ樞密院ニ御諮詢相成可然

ト認ム

勅令案

呈案附箋ノ通

主任者 東亞局第二課長

内閣總理大臣公爵近衛文

外務大臣廣田弘毅

内閣總理大臣公爵近衛文麿殿

明治四十一年勅令第五號廢止ノ件請議

本件ニ關シ別紙案文ノ通勅令御發布相成候様致度此段及請議候也



作務



外甲 一六

外務省

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ明治四十^四附警察官ニ關スル件廢止ノ件ヲ裁可
シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名御璽

昭和十三年 月 日

內閣總理大臣

外務大臣

外務省

勅令第 號

明治四十一年勅令第五號ハ之ヲ廢止ス

附則

本令ハ昭和十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

外務省

理 由

滿洲國ニ於ケル帝國ノ治外法權ノ撤廢及南滿洲鐵道附屬地行政權ノ移讓ニ伴ヒ廢止スルノ必要アルニ因ル

(参 考)

明治四十一年勅令第五號

在南滿洲帝國領事館附警察官ハ關東局警察官ヲシテ之ヲ兼ネシム
ルコトヲ得

参照

●明治四十一年勅令第五號（在南
滿洲帝國領事館附警察官ニ關ス
ル件）
明治四十一年一月十一日
勅令第五號

改正 昭和九年第三五二號

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ在南滿洲帝國領事館附警察官ニ關スル件ヲ裁可シ
茲ニ之ヲ公布セシム（總理、外務
大臣副署）
在南滿洲帝國領事館附警察官ハ關東局警察官ヲシテ之ヲ兼ホシムルコトヲ
得

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス



一明治四十一年勅令第五號在南滿洲帝國領事館
附警察官ニ關スル件廢止ノ件

右別紙ノ通本院ニ於テ決議上奏候條此段
及通牒候也

昭和十三年三月九日

樞密院議長男爵平沼騏一郎

內閣總理大臣公爵近衛文麿殿

臣等明治四十一年勅令第五號在南滿洲
帝國領事館附警察官ニ關スル件廢止ノ件
諮詢ノ命ヲ恪ニ本月九日ヲ以テ審議ヲ
盡シ之ヲ可決セリ乃チ謹テ上奏シ更ニ
聖明ノ採擇ヲ仰ク

昭和十三年三月九日

樞密院議長男爵^臣平沼騏一郎

勅令第

號

明治四十一年勅令第五號ハ之ヲ廢止ス

附則

本令ハ昭和十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

南一

(後日添附) 警一

明治四十一年勅令第五號在南滿洲帝國領
事館附警察官ニ關スル件廢止ノ件審査

報告

謹デ今回御諮詢ノ明治四十一年勅令第五號在南
滿洲帝國領事館附警察官ニ關スル件廢止ノ件
ヲ審査スルニ從來帝國ノ治外法權ニ基ク所ノ
在南滿洲帝國領事館所管ノ警察事務ノ爲メ同
領事館ニ配置スル警察官ハ事務連絡ノ便宜上
明治四十一年勅令第五號ニ依リ關東局警察官
ヲシテ之ヲ兼ホシムルヲ得ルコトトセリ然ル

(後日添附)

警一

明治四十一年勅令第五號在南滿洲帝國領
事館附警察官ニ關スル件廢止ノ件審査

報告

謹デ今回御諮詢ノ明治四十一年勅令第五號在南
滿洲帝國領事館附警察官ニ關スル件廢止ノ件
ヲ審査スルニ從來帝國ノ治外法權ニ基ク所ノ
在南滿洲帝國領事館所管ノ警察事務ノ爲メ同
領事館ニ配置スル警察官ハ事務連絡ノ便宜上
明治四十一年勅令第五號ニ依リ關東局警察官
ヲシテ之ヲ兼ホシムルヲ得ルコトトセリ然ル

ニ客年十二月一日以降右ノ治外法權ヲ撤廢シ
其ノ殘務ノ調理モ亦本年三月末日ヲ以テ結了
ニ爾後在南滿洲帝國領事館ニ警察官ヲ配置ス
ルノ要ナキニ至リ從テ右勅令ハ全ク無用ニ歸
スベキニ由リ茲ニ本件ヲ以テ之ヲ廢止セント
スルモノナリ乃チ本件ハ制度ノ變更ニ伴ヒ不
要ト爲ルベキ規程ヲ廢止セントスルモノニ外
ナラザルニ由リ此ノ儘之ヲ可決セラレ然ルベ
シト思料ス

右謹デ審査ノ結果ヲ報告ス

参照

○明治四十一年勅令第5號(在南滿洲帝國領
事館附警察官ニ關スル件)

在南滿洲帝國領事館附警察官ハ關東局警察官
ヲシテ之ヲ兼ネシムルコトヲ得

南二

濟

十三年
外甲一四五

昭和十三年三月十五日

內閣書記官長



內閣書記官



昭和十三年三月十五日
十三年三月二十二日

內閣總理大臣

法制局長官



外務大臣

三

陸軍大臣

五

文部大臣

六

遞信大臣



厚生大臣

五

內務大臣

五

海軍大臣

五

農林大臣

五

鐵道大臣

五

大藏大臣

興

司法大臣

五

商工大臣

五

拓務大臣

五

別紙外務大臣請議

一 在外公館職員定員令中改正ノ件

一 在外公館費用條例中改正ノ件

ヲ審査スルニ右ハ相當ノ儀ト思考ス依
テ請議ノ通閣議決定セラレ可然ト認ム
勅 令 案

呈案附箋ノ通

機

外務省

昭和十二年十一月二十四日

外務大臣 廣田 弘毅



内閣總理大臣公爵近衛文麿殿

- 一 在外公館職員定員令中改正ノ件
- 一 在外公館費用條例中改正ノ件

本件ニ關シ別紙案文ノ通勅令御發布相成候様致度此段及請議候也

外甲一四五

外務省

朕在外公館職員定員令中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名御璽

昭和十三年三月十九日

内閣總理大臣
外務大臣

外務省

勅令第一百二十四號

在外公館職員定員令中左ノ通改正ス

第一條第一項第二號中「八十六人」ヲ「八十七人」ニ改ム
同項第七號中「六十八人」
ヲ「七十人」ニ、同項第九號中「三百九十三人」ヲ「三百九十七人」ニ改ム

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

理由

真事務

一、中華民國太原ニ帝國大使館出張所設置ニ伴ヒ左記職員ヲ増置セ

ントスルモノナリ

大使館二等書記官

一

副領事

一

外務書記生

二

計

(四)

二、中華民國綏遠ニ在張家口帝國總領事館出張所設置ニ伴ヒ左記職

員ヲ増置セントスルモノナリ

副領事

一

外務書記生

一

外務省

計

(二)

中華民國包頭ニ在張家口帝國總領事館出張員事務所設置ニ件ヒ

左記職員ヲ增置セントスルモノナリ

外務書記生

一

計

(一)

在「ソ」聯邦帝國大使館ヲ充實ニ件ヒ左記職員ヲ增置セントス

ルモノナリ

大使館一等書記官

一

大使館二等書記官

一

計

(二)

大公使館ニ通譯官充實ニ件ヒ左記職員ヲ增置セントスルモノナリ

外務省

計	副領事	大使館一等書記官	大使館二等書記官	大使館一等通譯官	大使館二等通譯官	公使館一等通譯官	公使館二等通譯官	總計
(七)	二	二	一	二	二	三	三	(三)
外務書記生								
計								
(七)	四							

右ニ依リ左ノ通増員セラルル次第ナリ

外務省

(參照)

明治三十二年 六月二十
日 公布 勅令第二百八十一號 在外公館
職員定員令抄錄

第一條第一項

外交官、領事官、貿易事務官、大使館一等通譯官、大使館二等通
譯官、公使館一等通譯官、公使館二等通譯官、大使館電信官、公
使館電信官、外務書記生、外務通譯生及外務電信書記生ノ定員左
ノ如シ

二 大使館一等書記官、大使館二等書記官、大使館三等書記官、
大使館商務書記官、公使館一等書記官、公使館二等書記官、公
使館三等書記官及公使館商務書記官ハ通シテ八十六人

四 大使館一等通譯官、大使館二等通譯官、公使館一等通譯官、
公使館二等通譯官ハ通シテ二十二入

七 副領事ハ六十八入

九 外務書記生、外務通譯生及外務電信書記生ハ通シテ三百九十
三人

朕在外公館費用條例中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名御璽

昭和十三年三月十九日

内閣總理大臣

外務大臣

外務省

勅令第百二十五號

在外公館費用條例中左ノ通改正ス

別表第二號中張家口ノ項ノ次ニ左ノ二項ヲ加フ

大同	綏遠
1	1
1	1
甲 三、五〇〇〇 乙 三、〇〇〇〇	甲 三、五〇〇〇 乙 三、〇〇〇〇
一、五〇〇	一、五〇〇
一、二五〇	一、二五〇
一、一〇〇	一、一〇〇
一、九五〇	一、九五〇
一、二五〇	一、二五〇
一、九五〇	一、九五〇
一、六〇〇	一、六〇〇
一、四五〇	一、四五〇

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

在支那大使館在勤ノ副領事及外務書記生ニシテ太原ニ出張駐在スル

モノノ在勤俸ノ額ハ別表第二號張家口ノ項ニ規定スル副領事及外務

書記生ノ在勤俸ノ額トス

理由

中華民國山西省大同及同綏遠省綏遠二各張家口總領事館出張所ヲ新

設スルト在支大使館ニ副領事及外務書記生

外務省

參照

○在外公館職員定員令

明治三十二年六月
勅令第三百五十一號
(總理外務大臣副署)

在外公館職員定員令

- 第一條 外交官、領事官、貿易事務官、大使館一等通譯官、大使館二等通譯官、公使館一等通譯官、公使館二等通譯官、大使館電信官、公使館電信官、外務書記生、外務通譯生及外務電信書記生ノ定員左ノ如シ
- 一 特命全權公使、大使館參事官、大使館商務參事官及辦理公使ハ通シテ三十一人
 - 二 大使館一等書記官、大使館二等書記官、大使館三等書記官、大使館商務書記官、公使館一等書記官、公使館二等書記官、公使館三等書記官及公使館商務書記官ハ通シテ八十人
 - 三 總領事、領事及貿易事務官ハ通シテ八十人
 - 四 大使館一等通譯官、大使館二等通譯官、公使館一等通譯官、公使館二等通譯官ハ通シテ十九人
 - 五 大使館理事官及公使館理事官ハ通シテ十二人
 - 六 大使館電信官及公使館電信官ハ通シテ四人
 - 七 副領事ハ六十八人
 - 八 外交官補及領事官補ハ通シテ六十三人
 - 九 外務書記生、外務通譯生及外務電信書記生ハ通シテ三百八十九人
- 前項定員ノ外訴訟事件及非訟事件ニ關スル事務並登記事務ニ從事セシムル爲領事、副領事ヲ通シテ十三人及外務書記生十九人ヲ置ク
- 外交官領事官ヲ兼任シ又ハ領事官外交官ヲ兼任スルトキハ其ノ兼任ハ定員ノ内ニ算入セス